

六月作品

月集スバル

☆今月の四人☆ (小島ゆかり選)

岩盤 奥村 晃 作 * 東京

砂利岸に腰を下ろして流れ行く広き平らな水の面見詰む
枯れ葉らに交じりて羽毛一枚が運ばれて行く水の面を
踏まれ踏まれてほの輝ける岩盤の岩の面を踏み踏む我も
石、岩の区別はつかぬ粒砂と小石の区別つかぬ如くに
ねんごろに十五分焼きし鮎一尾頭から尾まで骨ごと食べた

ヒヤシンス 木畑 紀子 京都

ヒヤシンスの蕾ふくらむかたはらに菜の花活けぬ語りあへかし
まはだかのヒヤシンスの球力たま尽くし紫の花序押し上げてゆく
水中に白根ぎつしり水上に小花みつしりヒヤシンスの凜
ヒヤシンス咲く出窓へと寄るたびに香りの湖うみに溺るることし
花をへて皺む球根白根ごと埋めてやりたり春は復た来む

てふてふの影 小山 富紀子 京都

柏手の音ややしめり神にだに願へぬことあり深く頭を垂る
人生のあちらこちらに散らかししおもちやもそろそろお片付けどき
昔ねと言はねばならぬことふえてむかしむかしは今われの中
口だけは達者と友より葉書来る小町のやうに老いゆくらしも
てふてふの影をまたぎてこの道を行かねばならぬいつか一人で

神話では 水上 比呂美 東京

神話では(昼)は(夜)より生るといふ猫の仔生るる春の縁の下
春の日のをびなめびなの穏しさよ冥土の父母はいかにおはすや
母が生きてゐればよかつた生きてゐれば九十五歳むすめの子抱けた
眠剤を忘れて脳が電報を打つてゐるやうチキトクカエレ
がらがら戸の昭和の家の玄関に電報来にけり春のあけぼの



森重 香代子 山口

水島 晴子 兵庫

日影 康子 富山

きんいろの笛に奏づるひと節がひそかに濡らす宵の胸処を
壁にある訃報見をれば背近く、よう死にますなあ老いの声する
笑まひては昼餉の卓に語りつく豊頬のひと七十年代か
地にひくく淡青織き草のはなさむく顛ふも 父の忌明日は
どうでもいい末つ子だつた 幼年のわれを詠みたる父の句五、六

武田 弘之 神奈川

影山 一男 千葉

今年また命永らへ老いどちの花の宴に連なりあそぶ
未知のもの Z 世代に学ふべし昭和ひと桁生まれのわれは
「憧れはやめよう」翔平大喝す日米野球決戦の前
号外は「日本悲願の世界」乱れ飛び交ふ銀座の街に
卒寿なる一年過ぎて九十一、母よあなたの齡です今日は

高野 公彦 千葉

桑原 正紀 東京

光陰が空をわたりてまた一つわれに齡を恵む極月
駅近き道をゆくとき勤めあるふりして少し早足でゆく
「吾が顔」を「吾の顔」と書く歌人ゐて短歌滅亡論より寂し
ヒトの棲む地球汚れて夜ぞらより姿消したる鳥、けもの、うを
コロナ禍が下火となりて啓蟄の蜥蜴のごとく空港に来つ

水洩くきはまりながら墜ちてゆく溪川に沿ふ寒き日に来て
磐越ゆる水なめらかに盛り上がり落ちゆくきはの豊饒にして
谿川の水に沈みて浄らけき落葉にながき時過ぎむとす
卓の花はらりと零れ閑かなりその間に消えしわたしの時間
手習ひに行つて来ますと電話ありて帰宅の知らせいまだもなき娘
暮れてゆく寺奥にひとり見上げたり御堂の高屋根に渦巻く吹雪を
猛吹雪に備へて寺門の両扉を縄にてしつかり桁にくくりぬ
右足の踵のしもやけ癒えぬ間に雛の節句も過ぎてしまへり
隣家との地境の塀に沿ひゆけば梅の花匂ふ黄昏ちかく
人生の最終期にわれ眼をば病む口惜しさ言へば友も病むとぞ
腕時計二つ電池の切れしまま棚に眠りぬこの三年を
コロナ禍の三年オペ後の三年を苦しみ生きてけふの夕映え
小野茂樹のくさむらの歌憶ひつつまだ色あさき春の草踏む
古稀一歳祝ひてくるる友らゐて白木蓮の書ふくらむ
想ひ出のごとく咲へるしら梅にそそぐ光よ神が生みにき
につぼんの桜の花の蜜いかにインコ四、五羽がしきりついばむ
五分咲きの桜はインコについばまれ三分咲きほどになりてしまひぬ
野生化したインコを憎む声すれど一所懸命生きてるだけさ
ウマ娘に嵌まつた落合博満のユーチューブ見てすこし寂しい
大谷のセイフティーバントを批判せし落合それは頑迷すぎる



狩野 一男 東京

高井戸駅ホームに見えて快調に咲きはじめて今年の花
さくら咲く三月。サリン、サティアンとカナリアまとめて思ひ出すかな
三月はもの思ふとき咲き誇るさくらの下で夜半のねどこで
東日本大震災から十二年われ没趣味の老人である

宮里 信輝 神奈川県

山峡に日々竣りてゆく宮ヶ瀬ダム目守りて居たり二十年前
重力式コンクリートダムの宮ヶ瀬ダム平成12年に完成す
自宅よりクルマ走らせ二十分毎日通ふ大宮ヶ瀬湖
今日もまた逢ひに来ました鳥居浜宮ヶ瀬湖さんあをい湖
紅梅はあかい言葉で白梅はしろい言葉で語りくるなり

小島 ゆかり 東京

三月の空気の冷えに重さある上毛高原駅に降り立つ
早春の雪まだ残る猿ヶ京 「みなかみ紀行」百年ののち
春はまだ朝の冷気の澄みわたるみなかみの山の猿ヶ京の湯
われらみな猿の顔なり猿ヶ京露天の湯から顔だけ出して
旅行くはうしろ姿の時間なり土地びとが山がうしろから見る

島田 暉 神奈川県

寝ほけたる朝のまなこを目覚めさす水仙の花白く鋭し
老いといふやさしき霽につつまれぬ時計は休まず時刻む音
ローマ字を横に読めどもいつのまにか縦書きに読んでしまへる
老いほれし額の横皺深くなりつつじよ飛び出す鳥のはばたき
ゆるやかに死が近づけどまだ少し後日のやうだ雑炊する

大松 達知* 東京

〈少ない〉と人は言うときそれは在る 花粉いつでもどうぞの葉
雲丹と呼んで雲丹の一部を食うようにオーマツさんの勤務実態
咲いたのに咲いちゃったなど言われてる、十字架植物なかまの葉花
3分にいちど笑いを入れないと読んでもらえずテルマエロマエ
「友情」が普通名詞であることにしつくりこない娘十歳

田宮 朋子 新潟

かふかふと鳴き交はしつつわが家の屋根を越えゆく白鳥一家
夜の更けをパイプオルガンひびきたり雪降りつもる家のしじまに
百余年他人の住みしこの古屋移築してより四十五年

津金 規雄 神奈川県

ながき冬いかに耐へしか雪ふかき妻有に住みし縄文人は
高病原性インフルエンザウイルスを持つてあないかさこな白鳥
人生論読みしことなく生を継ぎ元号(ヘコロナ)四年目の春
咲くもあり芽吹くもありて早春の寒気嬉しも年重ねきて
木瓜咲けり淡きピンクに木瓜咲けりそのフェミニンな花弁の厚み
春浅く三色堇は風に吹かれをりわが足元にちぢこまりつつ
所有する願望はなし道すがら見る春の花とりどりあれど

清水 正子 神奈川

蠟梅は散ることなくて香の失せし花が貼りつく雪解の枝に
思考回路コロナコロナで目詰まりになりさうな日が少し遠のく
アポなしで待ち伏せしたい人があるなどと楽しも友の長電話
わが谷戸の夜空掃きつつ出でこよと春一番が口笛を吹く
ウイズ・コロナ時代を生きて人それぞれ思ひそれぞれ桜を仰ぐ

小嶋 一郎 佐賀

七十年歌作りして得しものと得ざりしものと多きはいづれ
生きる道歌のほかには無きがごとのめりし日々よ千里往くがに
どう見ても出来損なひにも程がある昼間の三首夕べの一首
千円のラーメン啜り身の程の節度を越えてよろよろと立つ
このところ脚力とみに衰へて敷居にさへもつまづく二度目

後藤 美子 北海道

連用日記今日より五年目縦に追ふ代はりばえせぬ老いの日常
自己判断推奨同調圧力とマスク一つに世の中揺るる
推奨の基準さまざまとりあへずマスクは持参思考は休止
しづかなる心をねがひ従はむ同調圧力といふ見えざるものに
声出さずうたはず聞けとオルガンを聴く礼拝が三年つづく

福士 りか 青森

まだ雪の残る津軽の春彼岸さくくりと墓地すすみゆく
三月の陽射しをぬけて吹く風のなほも冷たく墓地吹きわたる
姪とふたり墓参をしつつこの土にいつか眠らむわれかと思ふ
私への供物はビールをよろしくと言へば「体に悪い」と姪は
「断つ・捨てる・離れる」べきは何ならむ身ひとつで海を渡る白鳥

藤野 早苗 福岡

収集車まだ来ぬ夜の月かげを容れ発光すペットボトルは
バルテウスに選ばれし自負うつくしく節子クロソフスカド・ローラほほむ
枕から頭上がらぬ朝なり春の張力みなぎりすぎて
いらんこと言ふ脳よりも快不快直球で告げる腸を重んず
シンギュラリティもう過ぎてゐてちかごろはChatGPTに尋ねる

風間 博夫 千葉

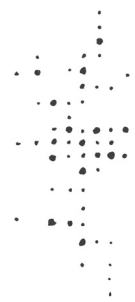
立ち話、話がはづみ長話、やがてひそひそ話となりぬ
のろけ話、てがら話に耳つぶしうはさ話に耳澄ましたり
〈話〉には花が咲くことあるらしいハライソに花咲き満ちてゐむ
よどみなく話すは話芸いや話術信じてキャッシュカード渡すな
金儲けのうまい話にけりをつけ呑みにいかうよコロナ禍下火

田中 愛子 埼玉

どこそこの王妃のやうと言ひながら朝餉がはりのカステラ食ふ
母消えし今ことさらに父思ふ逝きて四十余年の父を
「お元気で」風邪ひかないで「美容師の若きに今日もいたはれをり
荷をおろしひとつ大きく呼吸する青人草に春のゆふかぜ
怒つてる顔よりむしろ笑つてる顔がおそろし高市早苗氏

橘 芳 園 新潟

柏崎、刈羽配付済丸薬東京全戸千三百万個配付されしは聞かず
事故あらば一蓮托生原発七基の柏崎市がする移住促進事業
極まらば原発七基も攻めるべし底しれぬ闇ニンゲンを持つ
わがニイガタ汚染されなば清水トンネル、関越トンネル蓋さるるべし
環太平洋新期造山帯地震帯いはば赤兎に背負はす原発



大野 英子 福岡

抜けるやうな青空そして暖かな昼、いちにんのいのち奪はるもう一度会ひたかつたよ人柄がにじむ手紙で終はりだなんて右下がりの文字かすみゆく自他ともに認めし元気な九十歳の笑顔しか浮かんでこない福盛さん浮かぶ笑顔がわたしを泣かす切なさに無駄遣ひなどしてしまふわたしは弱いにげんだから

松尾 祥子 東京

声嗟らし泣き続けるみどり児の活力に部屋が膨張したり湯に浸かりほわわと欠ぶみどり児は一寸ほどの拳をひらくランドセル曾孫六人に買ふことを励みに母はこの世たのしむ音楽が鳴れば真似する幼るて日課となりぬラジオ体操花冷えのゆふべ雨戸を閉ざすときふとすれ違ふ過去世と来世

鈴木 千登世 山口

うすぐらさ裡に匿せば紙折りて紙切りて雪の文様を生む型染めの型の矢雪の文様を切り出しぬ銀のナイフで「あ」と漏れる利那のありて大半はやつてしまつた結末にある失敗も「味」と肯ふ老いの知恵日向の猫が大きく欠伸ぶ半顔をマスクに吞まれ来て三年さてどうしよう自由と言はれ

小島 なお* 東京

剥げかけのテフロン加工火のそばに立つときにだけ見えてくる森カレンダー捲るみたいに髪に触れ言葉すくなく長く友だち粉砂糖降らせてどちらかといえは網戸の外の雨がいいけど年齢の数だけ豆を食べてゆく残り13しばらく撫でる茴香のサラダにオイル回しかけ四月は欲しくなる喉仏

鈴木 竹志 愛知

遅蒔きに「居眠り聲音」を読みをれば春は来たりぬ三河の里に春の日は「居眠り聲音」に佳き季か はや十冊が棚に並びぬ広かつた横断歩道が狭くなる人、人、人の名古屋駅前マスクなき人もちらちら見え初めて花見の人の生声聞こゆ白秋の歌のひびきにさそはれて春らんまんの園に憩はむ

原賀 環子 東京

バスケット食べた歌が生まれたり三月ひなの節句の夜に五年ほど先飛ぶ夢をみてゐない飛ぶにもねんれいせいげんあるらし思へらく京都は桜奈良は梅 テレビに奈良の夕景うつる壁に佇つ自分の影が霊として見えてはあぶな寝たはうが良い歌メモにのこしたままの俳優のミシェル・ピコリにけふまた会へり

水上 芙季 神奈川

親指の爪が黄色い三月の蜜柑食みつ眺める職場母に髪切つてもらつておかつぱで働いてゐる産休まへを東京の桜の開花宣言が小さき音量で流れる職場子宮壁どうると胎児に蹴られをり内示を伝へられてる最中春菊を皿に並べるさよならとはじめましての季がまた来る

小田部 雅子 静岡

齊藤 梢 宮城

陽のなかに胎児のやうな形して土押し上げぬいんげんの芽は
白菜もブロッコリーも黄の花を咲かせて踊る三月のポタジェ
七十の春をうたへば唐突にひき剥がしたき過去せまりくる
いきいきと教師をしてゐたはずなのにふりかへりみる過去のざらざら
ざわざわと駆ける三月あたふたと走る四月の春はるかなれ

知らぬ間に右腕にある赤き痣 何かのかたち無言のかたち
ひめくりの（H）をめくる三月よ 忘れてゐないことばかりある
あの春は「花は咲く」とは思へずにただ黙々と生きてゐたつけ
津波見た ただそれだけが真実で十二年忌日からだが重い
春めいた午後であつたと思ひ出す二時四十六分以前を

詩歌句レッスン ● 小島ゆかり

よくあるテーマをひと工夫

《新聞転載》

表現の工夫をせよと言われたところで、
じっさいには何をどうすればよいのか、わ
からないと思います。そこで今回は、最近
わたしが読んだ歌集のなから、多くの人
に共通のテーマであり、表現の工夫のヒン
トになる作品をご紹介します。

「十年ぶりに会いたる」など簡単に言わ
ない」と気づくのです。
「十年ぶりに会いたる」など簡単に言わ
ず、「十年の時間が引き寄せたる」と、奥
行きのある言葉で表現しています。さらに、
まず自分が気づき、そして相手も……。そ
の場面と心理の動きをていねいに言うこと
で、強い説得力が生まれています。

母心。しかし米の袋は重い。けんめいにそ
の袋を運ぶ、また宅配荷物に出そうとして、
脚を踏ん張り、両腕で抱え上げるようにし
ているところ。「四つに組み」という表現
があるからこそ、その姿がぱっと目に浮か
ぶのです。ちよつとした工夫で、がぜん一首
が生き生きとしたことがわかると思います。
（おはじきをたくさんくれる祖母のよ
うお釣りを返す蕎麦の券売機）
川島結佳子「感傷ストープ」

〈十年の時間が引き寄せたる老いを我
は見る君も見ているならん〉
佐佐木幸綱「テオが来た日」

〈わが妻は米の袋と四つに組み娘のも
とへ送らむとする〉
柳宣宏「丈六」

十年ぶりに会った友人、あるいはかつて
の仕事仲間。たぶん向かい合つて語りなが
ら、その人の十年分の老いを、まざまざと
実感したのでしょうか。そしてふと、「きつ
と相手も、自分の老いを見ているにちが

歌集タイトルの「丈六」とは、あぐら
のことで。うちの妻もこのとおり、わた
しもこのとおりだわ、などと思う読者も多
いことでしょう。娘に米を送ってやりたい

まだ若い作者の第一歌集から。いろいろ
な物がおしゃれに様変わりした世の中です
が、蕎麦の券売機はなんだかレトロなまま
ですね。独自の比喩のセンスが、祖母の佇
まいを魅らせています。
よくあるテーマでも、こんなに魅力ある
歌が生まれています。